Satan Cross〜サタンクロス〜

ファンタジスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓａｔａｎ　Ｃｒｏｓｓ～サタンクロス～

【Ｎコード】
Ｎ１６３７Ｆ

【作者名】
ファンタジスタ

【あらすじ】
『サタンクロス』それは世界を混沌へ陥れる闇の扉。その扉は何をどうしても動かない…ある条件がそろう時にしか開くことはしない…サタンクロスを巻き込んで繰り広げられる戦いが今始まる…

第2章：幕開け（前書き）

港町ピュリにすむ少年キャンサーはある夜に大切な存在を失った。
そこから広がっていく謎。
キャンサーはデルタという人にアトンティ王国に連れてこられ、ようやく自分の果たす目標を定めた。
第2章。キャンサーに進化のときが・・・

第2章：幕開け

【第1節：修行開始】
キャンサーが決意を固めてから一夜。
ついに修行が始まった。

キャンサーはいつもどおりの8時に起き、トレーニングルームに向かった。

そこには赤い髪の男が待ち構えていた。

「さっそくだが…あぁ、自己紹介をしてなかったな。
俺の名前はデルタ・イプシロン。22歳だ。」

「よろしくお願いします。」
キャンサーは顔を下げて修行に望むのであった。

「まずは戦闘方法の説明からだ。
知ってると思うがこの世界では闘気(オーラ)を使って戦うのが基本。
そして、闘気は使い方によって数々の戦闘パターンが出てくる。
例えば、拳に闘気を溜めると威力は増大。刀や剣に溜めれば斬撃を飛ばしたり殺傷能力を高める。闘気をそのまま飛ばすことも可能だ。
他にも移動手段としてもつかわれているな。
そして一番重要なのが属性だ。
属性は全部で10個ある。
それは…光・水・雷・風・木・土・時・闇・霧・炎の10つだ。
この属性はそれぞれ特性も違う。
光は『浄化』・水は『沈静』・雷は『破壊』・風は『透明』・木は『吸収』・土は『硬化』・時は『静止』・闇は『昇華』・霧は『増

殖』・炎は『分解』。
これらの特性を生かすかによって戦闘は変わってくるから覚えておくといい。」
キャンサーはなかなか理解できなかったが何と無くは理解した。
「デルタさんは何の属性なんですか??」

「さん付けは止めてくれ。俺の属性は炎だ。武器はチャクラム。」
そういうとデルタの腕に真っ赤な闘気が表れ、赤色のチャクラムが出てきた。

「このようにして武器を生み出すんだ。
ふぅ、じゃあ昼休憩だ。
まぁ俺が行ったことをしっかり復習しておけよ。」
そういいデルタのチャクラムは闘気で燃え上がり消えた。
「はい!
武器は…しまったのかな??」

≪午前の部終了≫
午前の練習が終了し、キャンサーはアトンティの城下町を歩いていた。

周りには武器屋や宿屋。もちろんマンションや1軒屋もある。

「ここってこんなにでかかったんだ。」
初めてアトランティの城の内部から出たキャンサーはこの光景に驚きを隠せずつい走ってしまった。
楽しさのあまり時間を忘れてしまっていたキャンサーは薄暗い城下町のはずれに来ていた。

「しまったな。帰り方が分からないな。誰かに聞いてみようかな?

？」

しかしこのような目立たない場所には誰も人がいない。
キャンサーは不安で胸が一杯になってしまい暫く考え込んでいた。
その時、人の喋り声が聞こえてきた。

（人だ！でも何か大事な話みたいだけど…）

「見つかったか？」
「いや。どこにいきやがったんだ！？ここにいるって情報はあるんだけどな。」
黒い褐色の肌をした男とサングラスをかけた上半身裸の男が会話をしていた。
キャンサーは雰囲気がまずいと思いながらも話し掛ける決心をした。

「あの…」

「ん？」
黒い褐色の肌の男が低い声で返事をした。

「すいません。迷ってしまったんです。城への帰り方が分からなくて…教えてくれませんか？？」
キャンサーを緊張をしながらもしっかり訪ねた。

「城か？ここから東にまっすぐ行ってみると見えてくる。それより君はなぜこんなところに？」
黒い褐色の肌の男は東を指差しながらそういった。

「俺、まだここに来たばかりで…」

（まさか…）

「ところで君の名前は??」

もう一人の上半身裸の男が何かに勘付きそう聞いた。

「キャンシア・デ・ブッフバルトです。」

「そうか…」

不適な笑みを浮かべそういった褐色の肌の男はキャンサーに襲い掛かりキャンサーの口をふさいだ。

「まさかこのような陰で見つかるとは今日は運がいいな。」

その時城ではキャンサーがいなくなったことで騒々しくなっていた。

「どこに行きやがったんだアイツ!!」

デルタは不安な表情で少し怒りながら城を歩き回っていた。

デルタは屋上に行き口笛を吹いた。

そうすると空から大きな翼の鷹(たか)が降りてきた。

「キャンサーを探すぞ!」

デルタは鷹に乗り、上空からキャンサーを探し始めた。

【第2節：発見】

「くそ。見つからねぇ。」

デルタは上空から何度も探したが見つけることが出来ない。

それもそう。この城下町はとてつも無く広く建物も多い。
キャンサーがいるのは町のはずれのさらに陰。
見つからないのもしょうがない。

「どこに…　ん！？」

その時、ゲルタの鷹が急降下を始めた。

「おいキャンサーさんよぉ！いい加減着いて来てもらえないかな？」
上半身裸の男はキャンサーの抵抗に対してイラつきながら何度も腕をつかみ引っ張っている。

その時
「やっと見つけた。
…お前たちは誰だ。」
ゲルタは鋭い視線でそう言った。

「ゲルタさん！」
キャンサーは歓喜にあふれていた。

「おいおい。そんなに睨むなよ。」
上半身裸の男は呆れた表情でそう言った。

「誰だと聞いている！」
ゲルタがきつく言った。

「…俺たちはカオッサーの一員だ。
俺はカサンドラ・カドモス。」
褐色の肌の男が名を明かした。

「俺はオルフェウス・タロス。属性は…土！！」
そういった半裸のオルフェウスは手を地面にのせて叫んだ！
そして地面から斧の武器を取り出したオルフェウスはゲルタに向かっていった。

「これで終わり！」
オルフェウスは斧を振りかざし、ゲルタに向かって振り下ろした。

キン！！
オルフェウスの斧はゲルタのチャクラムによって防がれた。

「止められた！？」
驚きを隠せないオルフェウスは何度もゲルタに向かっていくがゲルタのチャクラムの前に弾かれてしまう。

「なんでだ！！くそ！こうなったら…」
そう言い放ったオルフェウスは斧を振り上げた。

『クレイク・アックス！』
そういい、斧を振り下ろすと強力な衝撃波がいくつも飛び出した。

「あぶない、ゲルタさん！」
キャンサーの心配に対してゲルタは無言で立ち尽くしている。武器を構えるそぶりも見せずただ立っているだけだ。

轟音が鳴り響く。
衝撃波はゲルタに直撃し、大量の砂煙を上げた。

「ははは！！調子に乗るからだ！」

得意げな顔のオルフェウスとは対照的にカサンドラは厳しい表情で砂煙を見つめている。

カサンドラは違和感を感じていたがオルフェウスは気づいていなかった。

自分の死角から猛烈なスピードで来るゲルタの存在に。

「横だ！！オルフェ…」

時すでに遅し。

オルフェウスの体は一瞬にして炎に包まれた。

「なんだ??助け…！」

オルフェウスの体は徐々に砕け散り消え去った。

【第3節：デルタの力】

砕け散り灰と化したオルフェウスのそばにはデルタの姿があった。

「・・・あくまでも予想だがお前は炎属性だな。始めにオルフェウスの土属性によって硬化された衝撃波はお前に確実に当たってたはずだ。しかしお前は無傷。

そう。お前の炎属性の分解で回避した。そしてオルフェウスを攻撃して倒したと予想する。」

カサンドラは冷静に分析をし始めた。

「その通りだ。なかなかの分析力だな。

それはそうと・・・なぜキャンサーを狙った！?」

デルタはチャクラムを器用に回しながらそう言った。

「あの方の命令だ。そいつを連れて来いとな。理由は分からいけど

な。」
カサンドラがそう言った。
「知らないってわけか。つまりお前はカオッサーの中でも下っ端だな？」
デルタがそう聞いた。
「さぁな。・・・今日はここまでだ。お前の情報はキチンと取ってある。これでこの土地は標的になるはずだぞ。」
そういい残してカサンドラは一瞬にしてその場から消え去った。
「キャンサー。帰ったらすぐに修行の続きだ。次は死ぬぞ？」
デルタは深刻な深い表情でそう言った。
「えっ？っていうか俺は何で狙われてるんですか？」
キャンサーは状況がよく読みこめずにただそう言うしかなかった。
「それは分からない。ただ、お前はサタンクロスに関しての重要人物みたいだ。さぁ帰るぞ。」
デルタとはそういいキャンサーと共に鷹に乗り込んだ。

その時黒い空間が広がる所では・・・
突然、闇を照らすかのように明かりが灯された。
「こいつはデルタ・イプシロン。なかなか闇の相場で評判の男で３９００万Ｆの賞金首だ。あの程度の男が勝てるはずが無いんだ。」
黒髪の渋い顔をした男がそう言った。
「あんたはなんで戦わなかったのかい？」
長身でアフロ頭の女がそう言った。

「今の俺では勝てないと思ってな・・・」
カサンドラが少しの笑みを見せながらそう言った。

「嘘はよせよ！バレバレだぜ！」
野性的な服装・顔をした男が大声でそう言った。

「それはそうとこれからどうする？」
カサンドラは全体を仕切りそう言った。

その時扉の向こうから黒服の男が現れた。
「1週間後にあの城を総攻撃ダ。
それまでにはキャンサーのやつも強くなっテル。
デルタ・イプシロンが育てるはずダ。
他にも水の魔術師アリエス・アリーズもイル。
あとは天才青年のクロエもいるらシイ。今は不在らしいガナ・・・
気をつけろヨ。」
黒服の男は暗黒の闇に包まれ消え去っていった。

「・・・なぜだ？キャンシアが強くなるまで待つ必要は無いはずだぞ。さっさとカタをつけるに越した事は無いからな。」
黒髪の渋い顔の男がそういうと、

「まぁ何か考えがあるんだろうねぇ。」
アフロの女がそう言った。

「では1週間後に間に合うように突撃準備をしておくんだぞ。」
カサンドラがそう言うと集まっていた者たちが徐々に闇へと姿を消しその場所にはもとの黒い空間へと戻っていた。

【第４節：修行再開】
アトンティの城にある修行場ではデルタとキャンサーが修行を再開しようとしていた。

「デルタさん…このままここにいたらまた攻められるんじゃ。。」

「そうだな…だが、カオッサーの謎を解くには戦闘は免れない。しかもココから離れてもいつかは戦うんだ。だから早めにあいつらのことを知っておかないとな。」

キャンサーは納得した表情になった。

「それじゃ修行再開だ！！！
まずはおまえ自身の武器を見つけることだ。そうじゃないと話にならないからな。」
そういうとデルタはチャクラムを出し、キャンサーの元に近づき突然キャンサーを斬りつけた。

「えっ。デル…タさん？？」

「少し手荒いがガマンしろよ。」
デルタは次々とキャンサーを斬りつけた。キャンサーにはもう意識が無かった。
「よし。」
デルタはそう言うと服のポケットから小さなカプセルを取り出してキャンサーの口の中に捻じ込んだ。
「これからお前は試練を受ける。キチンとした回答をしないと死ぬからな・・・」
キャンサーの意識が回復するとそこは渦巻き捻じれている空間が広

がり奇妙な声が鳴り響いた。
（突然だがテストだ。今から3つの質問を出す。もしお前が1つでも間違った解答をすればお前は永遠にもとの世界に戻ることは出来ない。）

「誰なんだ！？しかも質問って…」

キャンサーの事など見向きもせず謎の声は質問を出し始めた。

（お前は強くなって爺さんの敵を打ちたいか？）

「そんなの当たり前だろ！？」

（そうか。では2つ目の質問だ。
お前の理想とする力は何だ？）

「理想とする力・・・
それは、大切な人を守れて闇を光に変えることの出来る力かな？？」

（・・・最後の質問だ。
自分は強くなれるか？）
「なれるじゃなくて・・・なって見せるさ！」

（そうか。お前はずいぶん純粋なやつなんだな。いいだろう。合格だ！このテストではお前にふさわしい武器を見つけるためのテストでもあった。真の目的は違うがな・・・）

「真の・・・目的？」

「いずれ分かる。」

それきりこの奇妙な声が聞こえてくることは無かった。
この空間にいるキャンサーの元にある一筋の光が降りてきた。
何かがその光に包まれているようだ。キャンサーをその光に手を差しのばした。

「何だろ？コレ・・・」
キャンサーが光から取り出したのは一つの剣だった。普通の剣とは少し形などが違うが何の変哲も無い剣だ。
その時剣から光が噴出し気がついた頃には城のトレーニングルームにキャンサーはいた。

「武器・・・手に入れたんだな！」

「ゲルタさん！」
トレーニングルームにはゲルタさんが一人たたずんでいた。
キャンサーの手にはしっかりと剣が握られていた。

「お前は剣を使うのか。剣の修行ならアイツに任せたほうがいいかもな・・・」

「アイツ？」

「あぁ！言ってなかったな。この城にいる強い戦士はオレとアリエス様とあと一人いるんだ。クロエっていうんだが・・・もう少しで調査から戻ってくるはずだ。クロエは刀の使い手だからな。まぁ俺が教えるよりはいいだろう。
じゃあクロエが帰ってくるまで休憩だ。」

そういいデルタは部屋から立ち去っていった。

「この剣・・・何か不思議な感じがするんだよな～」
キャンサーはじっと剣を見つめながらそう呟いた。

それから６時間後午後１０時。

「結局今日はクロエさんって人帰ってこなかったよな～まぁ今日はゆっくり体を休めて寝るとするかな・・・」

キャンサーの修行第１日は終了した。　）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1637f/

Satan Cross～サタンクロス～

2010年10月23日12時29分発行